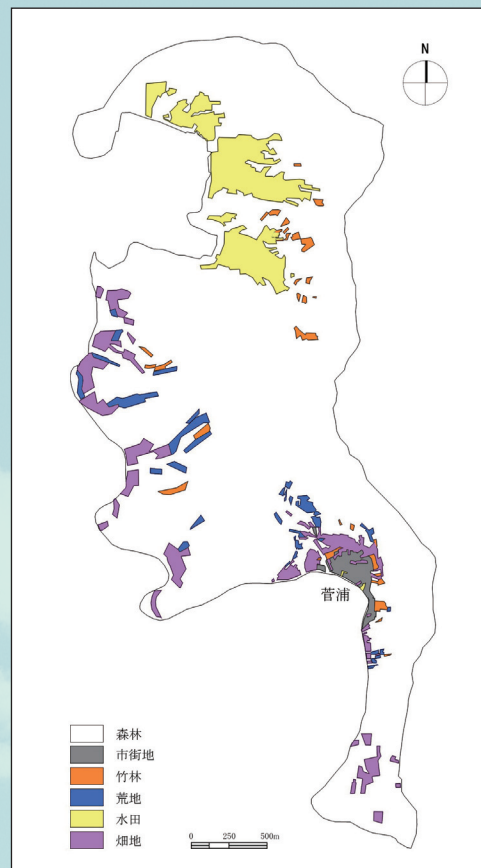
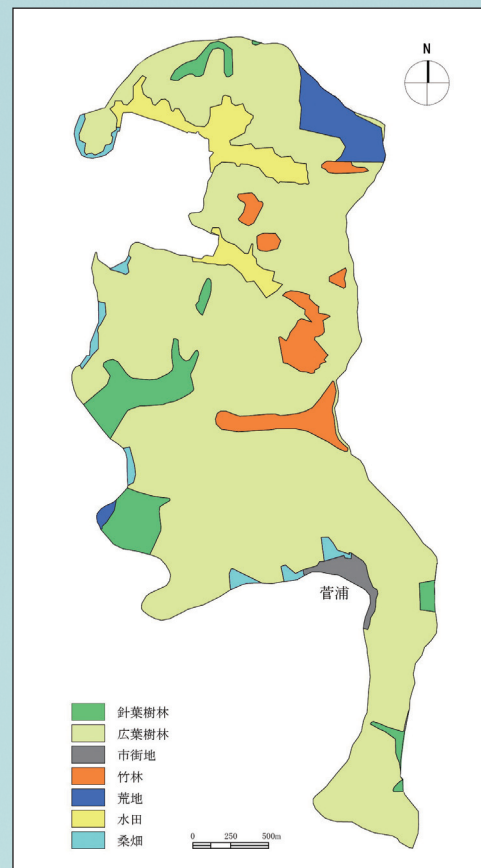


菅浦の自然はどのように変わってきたの？

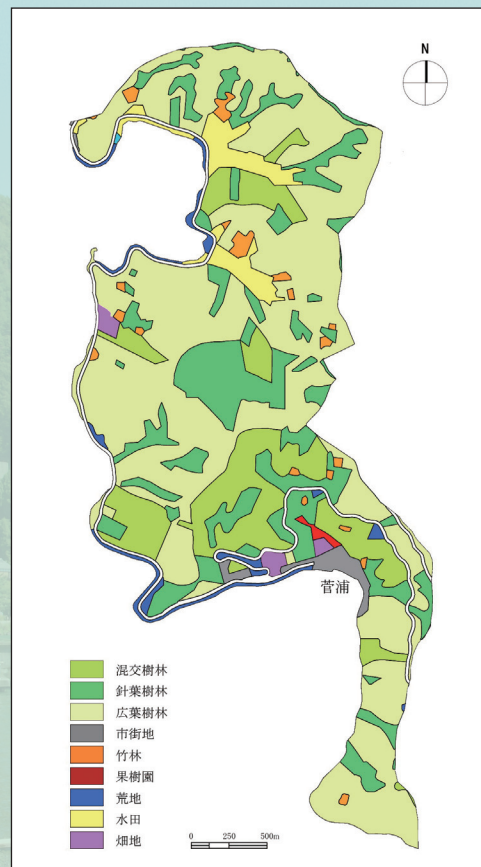
作図：深町加津枝（京都大学准教授）



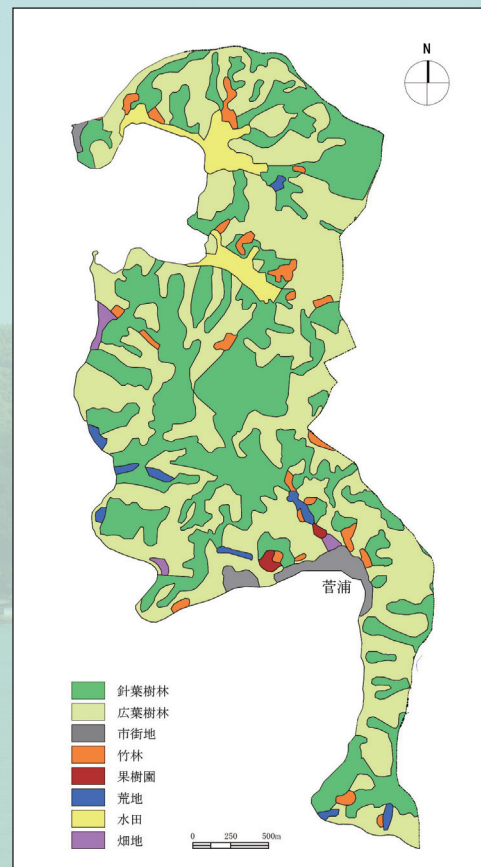
明治初期 水田が現在よりも広くあります。畑地も集落周辺や奥出、葛籠尾崎の山中に点在していました。



明治27年 全国的に養蚕業の盛んだった当時、菅浦でも桑畑をする土地が増えていました。



昭和52年 雑木を燃料にしなくなると、建築用材として価値の高いスギなどを植えるようになり、針葉樹林の拡大が目立ち始めます。



平成18年 竹林と針葉樹林が拡大しています。森林の利用や手入れが少なくなったことが要因の一つです。近年土砂崩れの危険性や獣害が増加しています。

変わりゆく景観

文化的景観

菅浦

滋賀県長浜市西浅井町

編集・発行

長浜市教育委員会 文化財保護センター

〒526-0802 滋賀県長浜市東上坂町981番地

TEL 0749-64-0395 FAX 0749-62-6357 Email bunkazai@city.nagahama.lg.jp

発行日 平成25年3月 平成24年度長浜市文化的景観保存活用整備事業



1

①琵琶湖から望むと菅浦本来の姿が見えます。②エリ漁。琵琶湖独特の漁法です。アユやイサザ、小エビなどが獲れます。
③集落背後の段々畑。ミカンなどがつくられますが、近年はシカやサルに食べられたり、イノシシに石積を壊されるなど、獣害が深刻化しています。
④ヤンマーの家庭工場。集落内には同じ規格の家庭工場が点在しています。



2



3



4

変わりゆく景観 ～湖と山に抱かれて～

初めて菅浦を訪れたとき、長く続く湖岸道路の先に、忽然と現れた集落に驚く人は多いのではないのでしょうか。琵琶湖と山々に挟まるように立地する集落は、四足門や寺社が点在し独特の雰囲気があります。中世惣村の名残を残す「隠れ里」といわれ

てもどこか納得するのではないのでしょうか。

しかし琵琶湖から菅浦を望むと、湖に開かれた大変開放的なムラだと気づきます。かつて湖上交通が主流だった時代、菅浦は背後の山や田畑で得た物資を舟に載せ、長浜や八幡など様々な所へ売りに行きました。

物を売って生活をしていたムラですので、その時代時代で売れる作物に作りかえなければなりません。たとえば中世には柑子やビワ、近世になると油実、明治時代では桑、そして昭和にはタバコなど。

集落内に点在するかわいらしいヤンマーの家庭工場も、昭和30年代に化石燃料の普及により林業が衰退するなか、菅浦の人々が懸命に嘆願し誘致されたものです。

景観は人々が懸命に生きてきた証です。菅浦の人々が家とムラを守るために、その時々で決断し、しなやかに生き抜いてきた歴史を景観から感じてください。

日記からみる明治の景観

数年前、菅浦のある家で、明治34・35年に書かれた日記が発見されました。日記によると、当時その家は林業と農業、養蚕業を組み合わせで生計を立てていました。冬は主に薬仕事、3月は木の伐採、4月になるとクヌギなどの植林をおこないました。6月は田植えがおこなわれる一方で、「桑モリ」「蚕上げ」「糸引き」など養蚕業も忙しくなります。7月になると少し落ち着き草取りや害虫駆除、畑仕事が仕事の中心です。10月中旬には油実拾

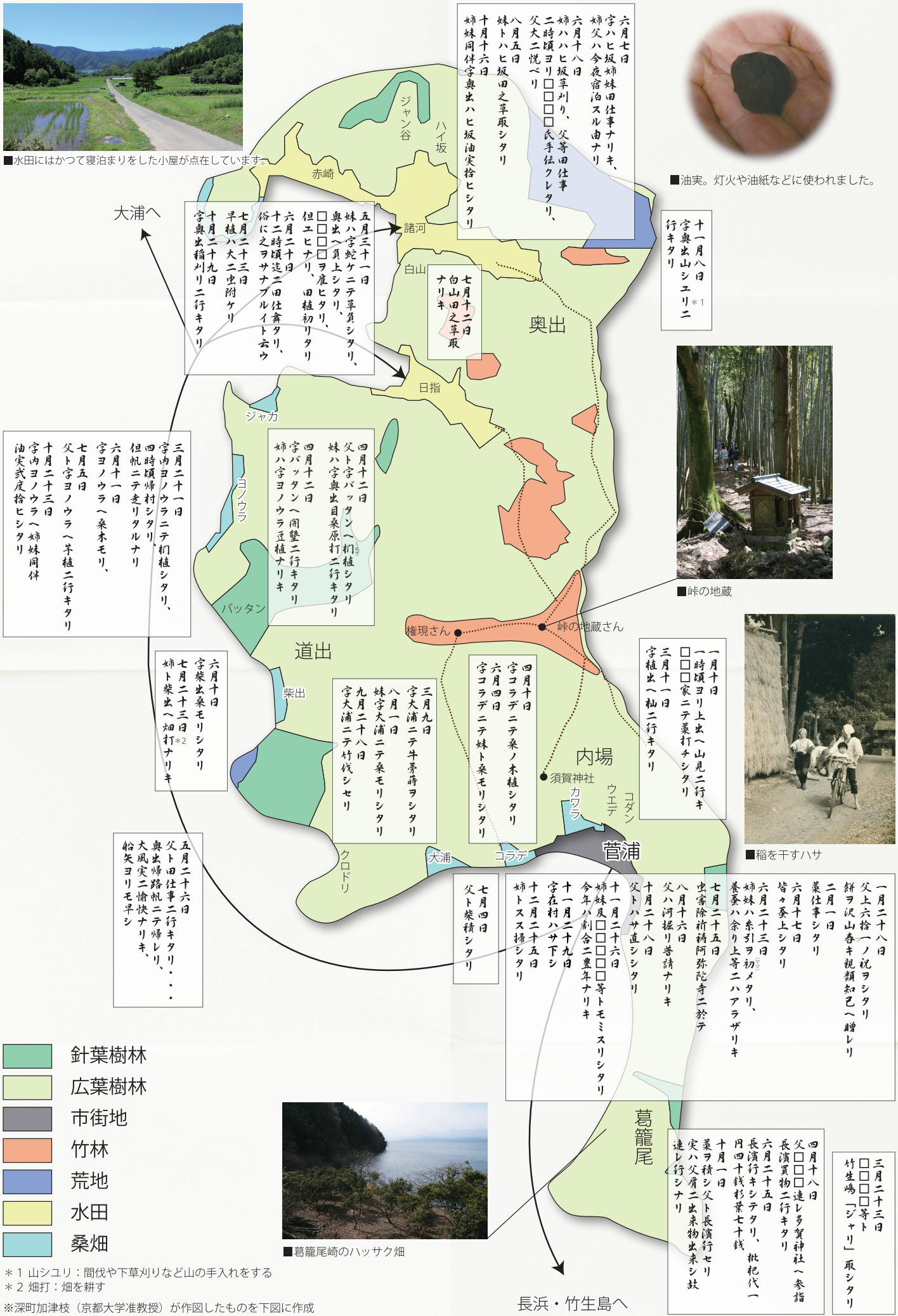
い、10月下旬から11月下旬にかけては稲刈り、稲干し、モミスリがおこなわれました。

当時は成長が速いクヌギを多く出荷していました。山をいくつか分割し一年毎に場所を変えながら伐採・植林を繰り返します。菅浦の山は様々な成長過程の森林や桑畑などがモザイクのようになった景観だったのです。

ほかにも、近所づきあいや作物の出荷先、買い物の内容に至るまで日記には克明に書かれ、当時の菅浦の暮らしぶりが明らかになりました。次ページの地図にはその一部を掲載しています。



■水田にはかつて宿泊まりをした小屋が点在しています。



* 1 山シユリ：間伐や下草刈りなど山の手入れをする
* 2 畑打：畑を耕す

※深町加津枝（京都大学准教授）が作図したものを下図に作成